

第8章 牛の背に乗って

バードは玉川の駅に移り、馬が見つかるのを待った。駅という字は昔は驛と書いた。30里（16キロ）ごとに置かれた。馬を置き、人や物を乗せて運ぶ。この村には、3日前に米商人がやってきて、馬という馬をかき集めて、米を運んで行ってしまったという。

そういえば。。。バードは日本に来て初めて馬に乗った時のことを思い出していた。あれは日光の快適な侍屋敷に滞在していた頃のことだった。日光の山奥に中禅寺湖を訪ねたとき、一日中馬に乗った。日本で乗馬に使われるのは、もっぱらメス馬でおとなしい。長い髪と首に生えるたてがみで顔がおおわれていた。ふだんは何もつけないで道を歩くが、石の多い道では、ワラジをはかされる。背中には、荷物用の鞍がかけられ荷物が積んであった。

バードは石垣にのぼって馬の背にピョンと乗り移った。平坦なところはよかったがジグザグにくねった坂道をのぼっていくと、背中が痛み出した。荷鞍の一番高いところに座っているのでバランスをとるのに背筋を使う。バードの背中には持病のカリエスが宿っており、背中には力を入れるたびにズキズキ傷んだ。遠くに中禅寺湖や、そこから流れ落ちる華厳の滝の絶景が見えたが、今のバードにはその景色を楽しんでいる余裕はなかった。

山をのぼり切り、下りに入ると馬のスピードが上がった。馬は坂道を転げ落ちるように降りていく。下りもまた、バランスをとるのに必死だ。背中が痛む。下り道の大きなカーブに通りがかったところで、バードはついに馬の背から大きく投げ出された。放物線を描いて飛んで行った先は半分ドロドロの池の中。

「これで背中からの痛みから解放される」

泥に飛び込んだバードは喜んだ。それぐらい辛い旅だった。

今度乗るなら、あれぐらいおとなしい馬がいいわね。そんなことを思い出しているところに、イトーが現れた。

「見つかりました、バードさん。とつてもかわいらしい乗り物ですよ」

「本当に！」

そう言うと、バードは外に飛び出した。生きた乗り物を一目みるなり息を飲んだ。

「Oh！これは馬じゃない、牛だ。イトー！お前馬と牛の区別もつかないの？馬と鹿の区別がつかない人のことをバカというそうですよ」

「この村には米商人が来て、馬に米を載せていったので、馬は一頭もいないんだそうです。」

牛は力が強く、あまり人間に反抗しません。この牛に乗ってみますか、バードさん。それとも、馬が帰って来るのを待ちますか？」

「まだ、時間はたっぷりあるわ。ここでグズグズしてたら、いつまでたっても北海道になんかたどりつけないわ」

「Oh！プリティ」

そういうと、バードはメス牛の横に行き、首をなでた。そして、そばにおいてある脚立にのぼって背中に乗った。

「さあ、行きましょう」

イトーをうながすと、馬子は牛を引き出した。牝牛はとぼとぼと、坂道を下っていく。

馬に比べると、ずいぶん背が低く、ゆっくり歩くので、乗り心地はむしろ馬よりもよかった。五分も歩かないうちに、牝牛は足を止めた。目の前には、雨で

氾濫した玉川が音を立てて流れている。飯豊山から流れ出る玉川は普段は、目を洗われるような青々とした清流だが、さすがにこれだけ雨が降ると、茶褐色に変わる。

激流には、途中いくつかの大きな石がおかれ、それを丸太で結んだ橋がかかっている。重くて大きい牝牛が乗ったら、折れてしまいそうな頼りなさだ。

「イトー！どうすればいいの？」

「とりあえず、降りてください。僕たち人間はあの玉川大橋を歩いて渡るそうです」

「玉川大橋？ビッグブリッジ！なんてことでしょう」
牛から降りたバードは、イトーの差し出す杖につかまりながら、よろよろと橋を渡った。みるからにへっぴり腰だ。



橋を渡り終えたバードが川を見ると、あの雌牛が浅瀬をゆっくりと歩いてくる。

「あ」

と叫ぶのと、牝牛が川に足をとられて倒れたのは、ほぼ同時だった。

「大丈夫ですよ。牛は泳げるんですよ」

馬子がそういうと、牝牛は起き上がって再びこちらに歩いてきた。橋のたもとについた牛は、何も起きなかったようにケロリとしている。

「あなた、頑張ったわね！」

そういって、牝牛の首をなでたバードは再び、牛の背に乗った。そして、大里峠に比べれば

だいぶ緩やかな第4番「茅野峠」に向かって歩き出した。

牛の背に乗ったバードから、いつしか固い表情が消えていた。